

じわつとじぶとで、

## 「MOMATコレクション」のこれから

蔵屋美香

二〇一二年秋、開館六〇周年を機に、「所蔵作品展 近代日本の美術」は新しく「MOMATコレクション」として生まれ変わりました。

建築家西澤徹夫さん(設計)、デザイナー服部一成さん(文字関係)の協力のもと、多言語のサイン表示で順路をわかりやすく示したり、床の質感を変えて照明の映り込みを減らしたり、休憩スペースを拡充したりと、いっそう快適に滞在を楽しんでいただける環境が整いました。また、この環境に盛りつける中身としての展示も、大小さまざまなテーマによる特集がゆるやかに時系列で連なる構成に変え、メリハリをつけるよう工夫しました。各特集の意図を充分に伝えるべく、主要な作品には、読みやすい書体、サイズの文字で和英の解説が付されています。

さて、ではこうして器、中身ともに新しくなった「MOMATコレクション」は、いよいよどのような「これから」に向け船出をすべきでしょうか。

\*

ところで、美術館の四―二階のコレクション展を訪れる方の数は、現在、年間十七万から二十万人ほどです。このうち約五万人がコレクション展だけを見に来館する方で、残りは一階企画展(さまざまな所蔵先から作品を一定期間借り集め、特定の趣旨のもと開催される展覧会)とともにコレクション展を鑑賞する方たちです。では、一階の来館者のうち、併せてコレクション展を見る方の割合はどれくらいでしょうか。答えは、全体の約四割です。つまり十七万から二十万のうち五万人を引いた十二万から十五万人は、企画展の四割の「ついで」と思われるお客さんで占められているのです。この数が多いか少ないかの判断はいろいろですが、かなり多くの方が、広報面での情報も豊富で、一定期間が

終われば見ることができなくなってしまいう企画展を目指して、美術館に足を運んでいることは事実です。

しかし、「今を逃すと見られない」という気持ちが人を動かすのは、考えてみれば当然です。とくに日本の場合、美術館・博物館を訪れるという行為の源流に、江戸期までの「出開帳でがいかいちょう」があるとの指摘があります。「出開帳」とは、「有名神社のお宝を一定期間よそへ貸し出して公開する催し」のことで、江戸ではたいへんな人気を得た出開帳がいくつもあつたようです。つまり日本の観客は、そもそも「今を逃すと見られない企画展」ペースで行動する習性を古くから備えているのです。

\*

では、もう一度問います。こんな「劣勢」の中で、コレクションを担当する部署のわたしたちは、今後どんな「これから」を目指すべきでしょうか。何しろ「MOMATコレクション」は、一会期の展示数約二〇〇点、年に四から五回の大規模な展示替を行い、年間総展示数は七〇〇点以上。七人の研究員が企画に励み、作品解説の執筆と英訳に四苦八苦し、展示替ともなると全員が総出で朝から晩まで一週間の肉体労働に耐えるのです。こうした苦勞に見合った何かをお客さんの胸中に生じさせたいと願うのは人情です。

\*

「MOMATコレクション」の特徴のひとつに、「展示作品の幅が広い」ことが挙げられます。たとえば四階には明治洋画の重要文化財が、三階には日本画の名品が、そして二階には現代美術が並んでいます。ところがこうした展示に対し、近年お客さんから、「日本画をもっと増やし、理解不能な現代美術は撤去してほしい」、または逆に「現代美術をもっと見たい。昔の作品は退屈なので不要」といったタイプの声が寄せられます。作品が幅広いだけに、来館される方の好みもばらばらで、ゆえに好きではないタイプの作品に出くわすケースが



リニューアルのお披露目となった「美術にぶるっ!」ベストセレクション  
日本近代美術の100年」展より 3階10室「日本画」のようす 撮影:木奥恵三

生じ、「見たいものが見られず、見たくないものを見せられた」との感情を持たれるようです。

しかし、明治に洋画の基礎が出来、応じて伝統的な絵画が「日本画」という枠にまとめられ、大正期には前衛が登場し、戦時下には軍の委嘱で戦争画が描かれ、戦後は抽象絵画やコンセプチュアル・アート(モノを作ることより概念を重視する潮流)が急速に押し寄せ、八〇年代以降再び絵画が台頭し……といった流れは、実際には前後に連続しあって作られたものです。特集形式を取りつつ同時に一〇〇年プラスαの時代の流れを示す「MOMATコレクション」の強みのひとつは、たとえテイストの異なる作品、時代のかげ離れた作品であっても、一〇〇年の流れの中に置いて見ればどこかで関連しあっている、ということを示せる点にあると思います。任意の一部を省いては、せっかくのこの強みが活かされません。

\*  
もうひとつ。「日本画が良いが現代美術は不要」「現代美術は好きだけど古いものはイヤ」といったご意見には、「現代美術が好きな人もいるのかも」「日本画が楽しみな人もいるのかな」といった、「自分以外の人の意見」への想像力が抜け落ち、自分の見知った枠の中で作品を感じようとする態度が見え隠れすると思えてなりません。

MOMATに限らず、どの美術館でも、「コレクションのよいところは、「今を逃すと見られない」企画展とは反対に、「いつでも見られる」ことです。実はこれこそが、「いつでも見られるなら今でなくてもいいや」と、常に「今を逃すと見られない」に競り負けてしまう理由なわけですが、これは裏を返せば、「いつでも、何度でも、いろいろな見せ方をすることが出来る」可能性を持つということでもあります。何せコレクションは、いつまでも気長に収蔵庫で出番を待っていてくれるのです。たとえばひとつの同じ作品を、日本画と関連付けたり、現代美術に引きよせて見せたりすることはできないでしょうか。その作品のいろんな側面を引き出し、好みの異なるお客さんにも「ん？」と思ってもらえるその日まで、じわっと、しぶとく、いろいろなやり方で展示を試すことはできないでしょうか。

\*  
ひとつ例をあげましょう。今年一月二十四日から五月二十六日まで、「MOMATコレクション」展内、二階十二室で、一階の企画「フランス・ペーコン展」にちなみ、「特集：ゆがむ人」を企画しました。ここでは、通常三階、昭和戦前期から戦時下あたりに展示

される鬘光《眼のある風景》(一九三八年)や藤田嗣治《アツツ島玉砕》(一九四三年)を、ヴィト・アコンチの映像作品《こじ開け》(一九七一年)や、咆哮する巨大な犬の立体作品、吉野辰海《水犬》(一九八九年)とともに展示しました。

《アツツ島玉砕》は議論の多い作品です。凄惨な戦闘場面を主題とするこの作品を、藤田の密かな反戦の祈り、と捉える向きも、藤田が嬉々として描いた「チャンバラ」だ、と捉える向きもあります。しかしこの展示では、こうした反戦、好戦の議論をひとまず置き、兵士たちの身体の実現に注目してもらおうと考えました。長く引き伸ばされ、よじれた藤田の兵士たちの姿は、どこか《水犬》に似てはいないでしょうか。押し合いへしあいする身体が互いを圧迫し、ゆがめあうさまは、アコンチの《こじ開け》に通じてはいないでしょうか。つまりここでは、複数の解釈同士が出会うための下準備として、時代もジャンルも異なる作品の助けを借りてそれまでの解釈をカッコに入れ、まずは身体の造形を眺める場を設けようと考えたのです。

\*  
この展示は、オープン早々よりアンケートで、「藤田はいつもの場所で静かに見たかった」「映像作品の音がうるさく《アツツ島》に集中できなかった」といったご意見をいただきました。もちろんめげません。でも、いわば「確信犯」として展示を組み立てた今回は、「お客さんが、いつもの自分の見方から引きはがされた、と感じたゆえの反応なんだな」と、少し前向きに捉えることができます。

さきほど述べた通り、収蔵庫には一万二千点あまりの作品が、三千平方メートル、全十三室の展示スペースへの出番を待って、辛抱強くベンチ入りしています。これはとても恵まれた環境です。いろいろな文脈で登板してくれるこれらの作品を何度でも用いて、凝り固まっているかも知れないお客さんの見方、感じ方を、少し強い言葉でいえば「挑発」することができるのですから。こんな風にして、異なる複数の見方が出会う土俵をつくること。これが、わたしにとってこれからはばらばらの間、「MOMATコレクション」が取るべき方向となりそうです。(美術課長)



「特集：ゆがむ人」より  
アコンチ《こじ開け》ごしに藤田《アツツ島玉砕》を見る